

---

---

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第110集

# 深谷城跡（第14次）

---

---

2010.1

深谷市教育委員会

---

---

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第110集

# 深谷城跡（第14次）

---

---

2010.1

深谷市教育委員会

# 序

このたび、深谷市教育委員会では、「深谷城跡（第14次）」の発掘調査報告書を刊行するはこびとなりました。

深谷城跡は、深谷の礎を築いた深谷上杉氏の居城で、湿地帯を利用した大規模な要害でした。江戸時代の初めに廃城となり、その後耕地化されました。現在は大部分が住宅地となりましたが、地割りや水路などに往時の姿を残しています。近年の発掘調査では、障子堀という特殊な堀や、井戸の跡などが多数確認され、その実態が徐々に明らかになってきました。

今回の調査では、絵図面などに表れていない堀や、多数の井戸、土坑が確認されました。これらの遺構は全て中世深谷城に関わるものと考えられます。また今回は、縄文時代の遺物が多く出土しました。竪穴住居跡は確認されませんでした。近くに縄文時代の集落が広がっていたものと思われます。

現在、深谷市には旧石器・縄文時代から近現代までの様々な遺跡が残されています。こうした遺跡は、一度消滅すると二度と見ることのできないものであり、これを保護し、後世に伝えていくことは私たちの大きな課題です。今回の発掘調査の成果を報告書というかたちにまとめ、広く市民の皆様にご紹介することで、郷土の歴史の古さやその優れた文化について、ご理解を深めていただきたいと存じます。また、この報告書が学術研究はもとより、学校、社会教育などの生涯学習活動を通じて、皆様が歴史を考えるための資料として役立てば、望外の喜びです。

今回の発掘調査および報告書作成にあたり深いご理解とご協力をいただきました関係者の皆様に関心から感謝を申し上げます。序にかえます。

平成22年 1 月

深谷市教育委員会

教育長 猪 野 幸 男

## 例 言

1. 本書は、埼玉県深谷市仲町456における分譲住宅建設工事に伴う遺跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、深谷市教育委員会が主体となり、調査費用は、旭化成ホームズ株式会社が負担した。
3. 発掘調査期間は、平成21年8月17日～平成21年8月24日である。
4. 発掘調査及び出土遺物の整理、報告書の執筆は知久裕昭が担当した。
5. 遺跡の基準点測量及び遺構測量は、中央航業株式会社に委託した。
6. 鉄製品については、瀧瀬芳之氏のご教示を得た。
7. 出土遺物は、深谷市教育委員会が保管している。
8. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、次の諸氏から数々のご指導ご助言を賜った。

青木克尚 古池晋禄 瀧瀬芳之 富田和夫 鳥羽政之 永井智教 松田 哲  
(敬称略)

## 凡 例

1. 遺跡原点は、世界測地系による国土標準平面直角方眼座標  $X = 22140.000$ 、 $Y = -49420.000$  である。また、各遺構図における方位指示は、全て座標北を示している。
2. 遺物の注記、および原図における遺構の略号は、次のとおりである。  
土坑…S K、井戸…S E、堀…S D
3. 遺構・遺物実測図の縮尺は、適宜スケールで示した。
4. 土層説明中の色調については、『新版標準土色帖』によった。

## 発掘調査の組織

調査主体者	深谷市教育委員会	教育長	猪野 幸男
		教育次長	石田 文雄
		次長	島崎 保
事務局	深谷市教育委員会生涯学習課	課長	澤出 晃越
		課長補佐	吉場 厚仁
		課長補佐	須藤 忠昭
		文化財保護係長	村松 篤
		主査	宮本 直樹
		主任	荻野 直美
		主任	知久 裕昭
		主事	幾島 審
		主事補	飯島 峻輔

### 調査参加者

梅沢 政子 江原佳与子 大澤 大美 栗原貴世実 齋藤 舞 関口由美子  
菱田 晃彦 山野 政子 除村 敦子 吉野真由美

# 目 次

序	
例言	
発掘調査の組織	
I 発掘調査の経過	1
1 発掘調査に至る経過	1
2 発掘調査の経過	1
II 深谷市の地理的環境と周辺遺跡の様相	2
III 遺構と遺物	6
1 概要	6
2 縄文時代の遺物	6
3 中世の遺構・遺物	9
a 土坑	9
b 井戸	13
c ビット	15
d 堀	15
IV 調査のまとめ	19
報告書抄録	

## 挿図目次

第1図	深谷城跡及び周辺の遺跡分布図……………	3	第9図	第1号井戸……………	13
第2図	深谷城跡の位置と発掘調査区……………	4	第10図	ピット群(1)……………	14
第3図	深谷城跡第14次調査区全体測量図……………	5	第11図	ピット群(2)……………	15
第4図	縄文時代の遺物(1)……………	7	第12図	土坑・井戸・ピット出土遺物……………	16
第5図	縄文時代の遺物(2)……………	8	第13図	第1号堀……………	17
第6図	第1～8号土坑……………	10	第14図	第1号堀出土遺物……………	18
第7図	第9～12・14・15号土坑、第2号井戸……………	11	第15図	深谷城跡全体図……………	20
第8図	第13・16号土坑……………	12			

## 表目次

第1表	深谷城跡及び周辺の遺跡一覧表……………	3
-----	---------------------	---

## 図版目次

図版1	調査区全景(東から) 調査区全景(西から) 南部遺構群
図版2	第1号土坑 第2～8号土坑 第4～8号土坑
図版3	第9～11・14号土坑 第15号土坑 第13・16号土坑
図版4	第1号井戸 第2号井戸 第1号堀
図版5	第1号堀遺物出土状況 調査風景 縄文時代の遺物(1) 縄文時代の遺物(2)
図版6	縄文時代の遺物(3) 第11号土坑、第1号井戸出土遺物 第1号堀出土遺物(1) 第1号堀出土遺物(2) P15出土遺物

# I 発掘調査に至る経過

## 1 発掘調査に至る経過

深谷市は、埼玉県北部に位置し、北を群馬県との境に接する。平成18年1月1日に旧岡部町、旧川本町、旧花園町と合併し、総面積137.58km<sup>2</sup>、人口約146,500人となった。当地は農業、工業ともに盛んで、深谷ネギの産地としても有名である。歴史的にも、後期旧石器・縄文・弥生・古墳時代を始め、幡羅郡家や榛沢郡家が造られそれぞれ郡の中心として機能していた奈良・平安時代、また百済木遺跡で豪族が居宅を営んだ奈良時代、深谷上杉氏の拠点であった室町・戦国時代、宿場町として栄えた江戸時代、そして近・現代まで多くの遺跡、文化財が残される。鎌倉時代の有力御家人であった畠山重忠の本拠地として、或いは近代日本経済界を築いた渋沢栄一の生地としても良く知られる。

深谷城跡は、JR深谷駅より北へ約920m、櫛挽台地先端から妻沼低地にかけて立地する。標高は約35mである。遺跡の範囲は、古地図や地割から、南北約600m、東西約500mの範囲に広がり、面積は約19.8haと推定される。

関東管領家の一族である深谷上杉氏の居城とされ、埼玉県の旧跡に指定されている。これまでに深谷市教育委員会により13度、埼玉県埋蔵文化財調査事業団により1度の調査が行なわれている。これまでの調査で、掘立柱建物跡や板塀跡、井戸、堀、土塁等の遺構が確認されている。堀の一部は、大規模な障子堀である。また、平安時代の掘立柱建物跡や溝も確認されている。そのため、深谷市教育委員会では、深谷城跡周辺で事前調査等を行ってきた。

平成21年7月27日、深谷城跡地内の深谷市仲町456で分譲住宅建設工事の実施が明らかとなった。深谷市教育委員会は施工主である旭化成ホームズ株式会社との協議を経て、平成21年8月6日に当該地の確認調査を実施した。調査の結果、土坑、ピット等の遺構や縄文土器が検出された。この結果を踏まえ、発掘調査の

実施について、市教育委員会と旭化成ホームズ株式会社とで協議を行い、工事により埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲について、市教育委員会が主体となって発掘調査を実施することで合意した。

市教育委員会は直ちに、文化財保護法第99条の規定に基づき、埋蔵文化財発掘調査通知（平成21年8月11日付深教生発第451号）を提出し、準備に入った。なお、埼玉県教育委員会教育長から、平成21年8月31日付教生文第5-533号で指示通知を受けた。なお、当初は仲町遺跡として扱ったが、後に改めた。

## 2 発掘調査の経過

分譲住宅建設工事に伴う、深谷城跡第14次発掘調査の経過は、概ね以下の通りである。

8月14日（金）表土剥ぎ、器材搬入、遺構確認、土坑掘削。

8月17日（月）土坑掘削。

8月18日（火）土坑掘削、断面測量。

8月19日（水）都合により作業中止。

8月20日（木）土坑・井戸掘削、断面測量。

8月21日（金）土坑・井戸・堀掘削、断面測量、写真撮影。

8月24日（月）井戸・堀掘削、断面測量、写真撮影、器材撤収。

8月25日（火）平面測量。

8月26日（水）埋め戻し。

調査面積は130m<sup>2</sup>であり、中世の土坑16基、井戸2基、ピット31基、堀1条が確認された。

今回の発掘調査を行うにあたり、深いご理解とご協力をいただいた方々をはじめ、この文化遺産を記録保存し、後世に伝える作業のためにご協力いただいた全ての方々に敬意を表する。



## Ⅱ 深谷市の地理的環境と周辺遺跡の様相

深谷市の地形を概観すると、東西に走るJR高崎線付近を境として、南側に櫛挽台地が広がり北側には妻沼低地が形成されている。櫛挽台地は荒川によって作られた古い扇状地が浸食されてできた沖積台地で、寄居付近を頂部としている。妻沼低地は、利根川の自然堤防及び沖積低地であり、加須低地と並び利根川の中流低地の一つに数えられる。

櫛挽台地は構造的には、北西側の武蔵野面に比定される櫛挽面（櫛挽段丘）と、南東側の立川面に比定される寄居面（御稜威ヶ原段丘）とで段丘状に形成されている。櫛挽面はほぼJR高崎線沿いの崖線で比高差5～10mをもって妻沼低地と接しているが、寄居面は高崎線より北へ1.5～1.8kmほど延びていて、比高差2～5mをもって妻沼低地と接している。接線付近での標高は櫛挽面が40～50m、寄居面が32～36m、妻沼低地が30～31mである。櫛挽面は標高70m付近より発する上唐沢川、押切川、戸田川、唐沢川等が北流していて、櫛挽面北端部は南北に台地を開析する浅い谷が発達したものと考えられる。発掘調査で埋没谷が検出されることも多い。また、先端部には所謂先端湧水と認められる池等もある。寄居面にはこうした谷筋はほとんど認められず、妻沼低地と接する台地先端部を除き、水利上は生活に不向きだったと考えられる。

妻沼低地は、利根川右岸に広がる肥沃な低地である。南は熊谷市付近を境として秩父山塊に連なる丘陵や台地と大宮台地に挟まれた荒川低地に続き、東は加須低地に接する。妻沼低地の南端に櫛挽面、東に寄居面を控える一角に深谷市の中心部があり、周辺では住宅地が増加している。妻沼低地は現在ではかなり平坦であるが、利根川の氾濫や流路の変遷等により、自然堤防が発達したものと考えられる。

深谷市内で確認されている旧石器時代の遺跡は多くはないが、荒川右岸の江南台地上には、細石刃や彫刻刀形石器が出土した白草遺跡等がある。旧深谷市域では旧石器はほとんど出土しておらず、西大沼の花小路

遺跡と東方の幡羅遺跡で出土したナイフ形石器2点のみである。

縄文時代では、台地の先端部に当たる東方城跡で草創期の可能性がある尖頭器が出土している。また、上野台の小台遺跡からは、早期押型土器や前期黒浜式土器、諸磯式土器の破片が出土している。上野台の割山遺跡からも、諸磯a式土器が多く出土する。

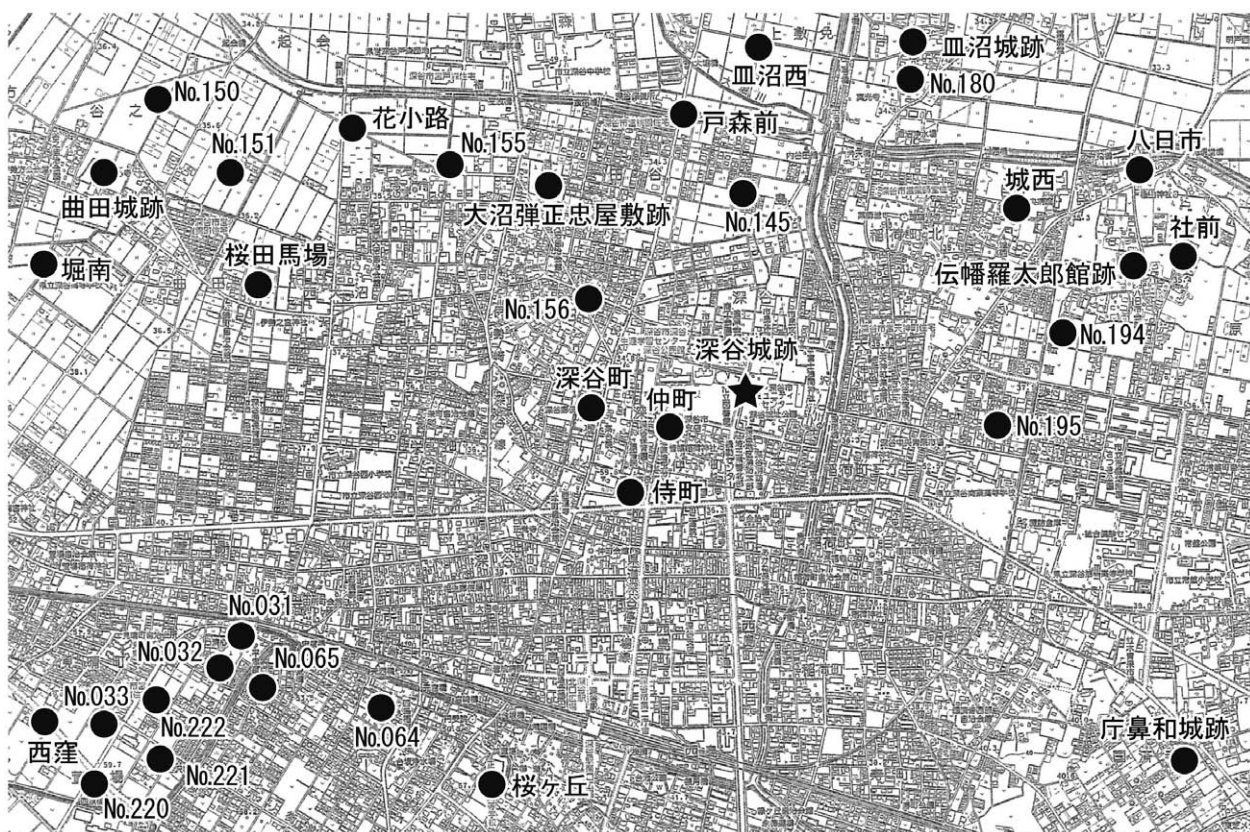
縄文中期、特に後半になると遺跡数やその規模は増大する。小台遺跡は、多量の土器や石器を包含する埋没谷を中心に住居や土坑群が展開する。遺構は中期中葉～後期前葉までのものがこれまでに検出されている。小台遺跡と時期的に重なる遺跡は数多く、小河川を挟んで小集落が多数分布していたか、集落が移動していたものと思われる。

縄文後・晩期になると、生活域の中心は櫛挽台地から妻沼低地へと移っていく。上敷免遺跡では、包含層から在地の後・晩期の資料に混じり、東海系条痕土器が検出されたり、埼玉県では初の遠賀川系の壺が検出されるなど、他地域との交流を考えさせられる。

弥生時代に入ると、上敷免遺跡で中期の再葬墓と、住居跡が確認されている。また、上敷免森下遺跡で中期の再葬墓、宮ヶ谷戸遺跡で中期の住居跡が確認されている。岡の四十坂遺跡も該期の代表的な遺跡である。

古墳時代前・中期の集落は、森下遺跡や下手計西浦遺跡、皿沼西遺跡等で確認されており、当該地での調査例が増加しつつある。古墳時代後期前半になると遺跡数は爆発的に増加し、妻沼低地の自然堤防上に大規模な集落が営まれる。この時期に小規模な円墳が数多く造られるようになり、櫛挽台地の先端部に形成される木の本古墳群や白山古墳群等の古墳群が形成される。

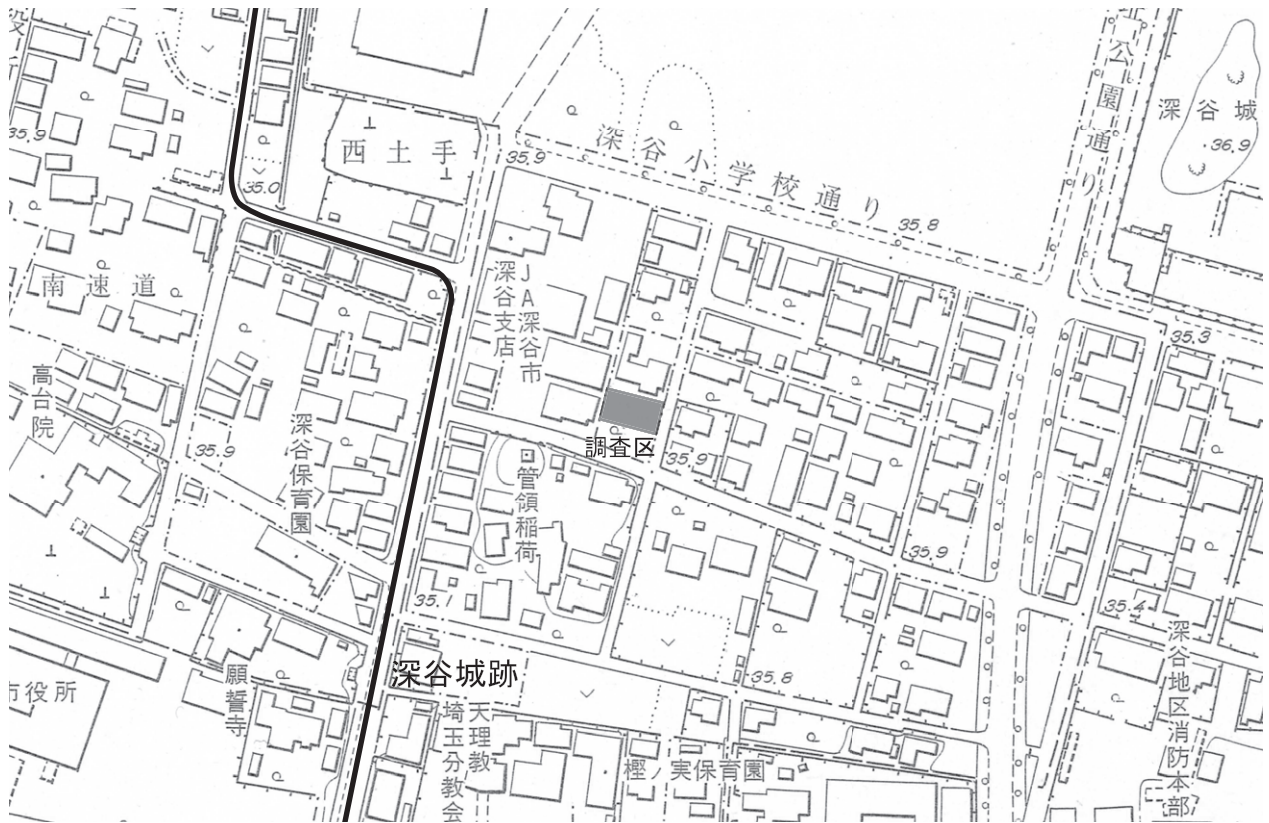
7世紀頃には上敷免遺跡等それまでの大集落は縮小傾向になり、代わって宮ヶ谷戸遺跡や東川端遺跡、清水上遺跡等、幡羅郡家と推定される幡羅遺跡に近い位置の集落規模が拡大する。律令期には、深谷市の東部は幡羅郡、西部は榛沢郡、南部は男衾郡に属すると考



第1図 深谷城跡及び周辺の遺跡分布図 (1/20,000)

遺跡名称	時代	遺跡名称	時代
深谷城跡	古墳前期、平安、中世、近世	桜ヶ丘	弥生中期、古墳後期～平安
曲田城跡	中世	No.031	古墳
桜田馬場	中世	No.032	縄文中期
堀南	縄文前期、古墳前期・後期～平安	No.033	古墳後期～平安
花小路	平安、中世	No.064	縄文中期
大沼弾正忠屋敷跡	中世	No.065	古墳後期～平安
深谷町	縄文中期・後期、古墳中期	No.145	古墳後期～平安
仲町	縄文後期	No.150	縄文後期、古墳後期～平安
侍町	中世	No.151	古墳後期～平安
皿沼城跡	中世	No.155	縄文中期・後期、古墳後期～平安
皿沼西	縄文後期、弥生、古墳前・中期、平安	No.156	縄文、古墳後期～平安
戸森前	古墳前期・中期・後期、奈良、平安	No.180	弥生中期、古墳後期～平安
城西	縄文前期・中期、古墳後期～平安	No.194	古墳後期
八日市	縄文後期、古墳後期～平安、中世	No.195	古墳後期
伝幡羅太郎館跡	中世	No.220	縄文前期・中期
社前	縄文前期・中期、古墳後期～平安	No.221	弥生中期
庁鼻和城跡	中世	No.222	縄文
西窪	縄文前期		

第1表 深谷城跡及び周辺の遺跡一覧表



第2図 深谷城跡の位置と発掘調査区 (1/2,500)

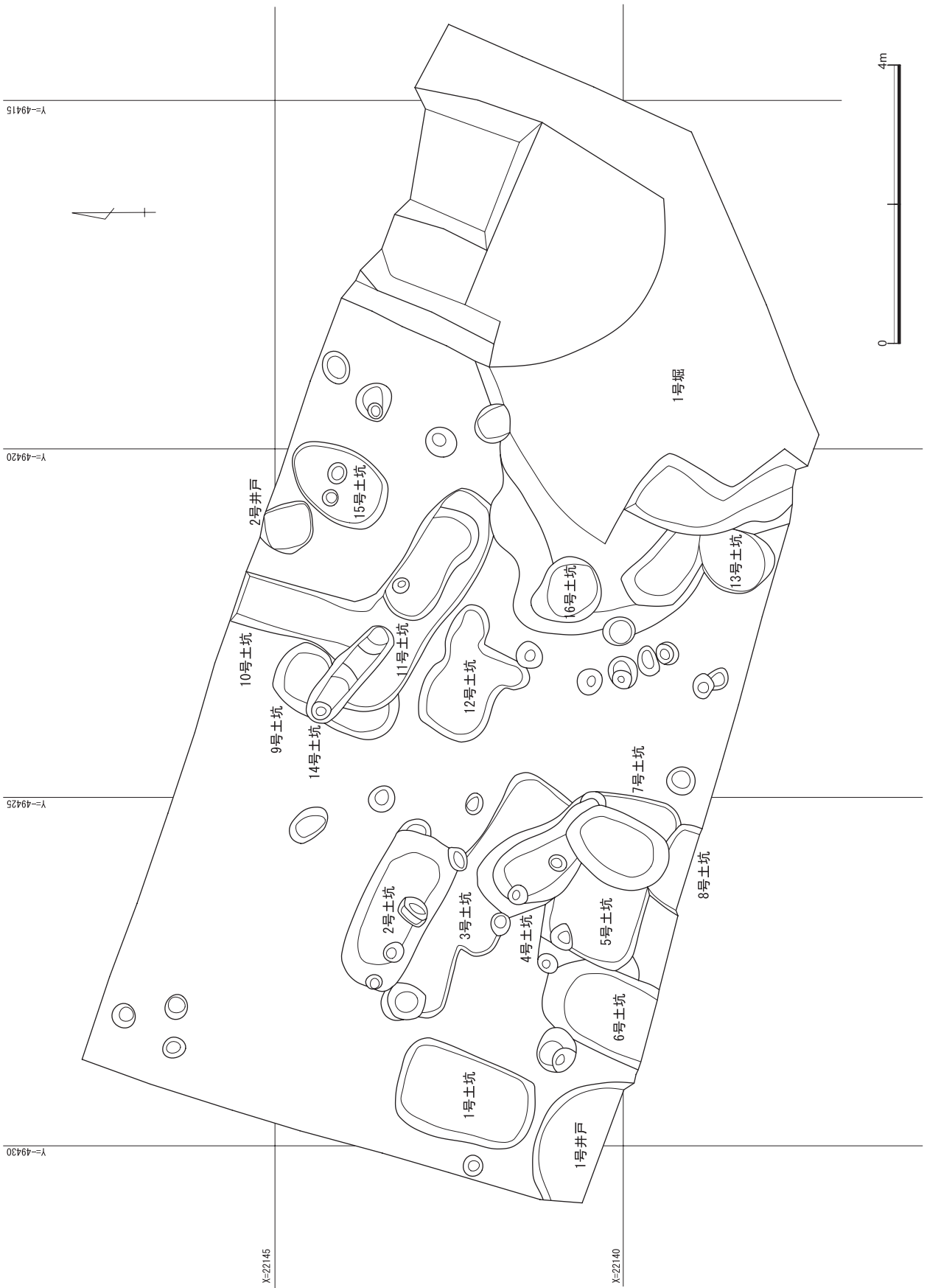
えられる。榛沢郡の郡家正倉跡は岡の中宿遺跡で発見されている。幡羅郡家跡である東方の幡羅遺跡は、正倉や館等の遺構がこれまでに確認され、更にその範囲、内容を確認するための調査が継続中である。また、新屋敷東遺跡からは、正倉別院の可能性のある大型建物跡が検出されている。

平安時代には、深谷城跡、堀南遺跡、花小路遺跡等、台地の先端部に新たに集落が営まれるようになる。これらの集落は、榛沢郡と幡羅郡を結ぶ水路の可能性が指摘される福川の流域に位置する。

平安時代末期以降は、猪俣党武士団の居館が各地に出現する。代表的なのは、県指定史跡にもなっている人見館跡である。それに近接する吹張遺跡でも、館等の施設跡が検出されている。また、鎌倉街道上道の跡が、旧川本町域から旧花園町域に残る。そして室町時代以降は深谷上杉氏の本拠地となる。深谷上杉氏は、当初庁鼻和城に居を構えたとされるが、5代目房憲

の時に、古河公方勢力との戦闘に備え、より堅固な深谷城に移ったとされる。深谷城跡の北東約1kmには、深谷上杉氏の宿老岡谷香丹が築いたと言われる皿沼城跡があり、北方の守りを堅固なものにしている。また、香丹が隠居後に移ったとされる曲田城跡が北西にある。東に約3kmの台地の先端部には東方城跡がある。周辺には他に家臣の館が分布していたと思われ、南方約1.8kmには、家臣の館跡である秋元氏館跡、南西約2.8kmには、古河公方勢力を牽制し人見地域を防衛するために築かれたと考えられる館跡が検出された押切遺跡が存在する。また、割山西遺跡では、伝承等が一切残っていないが、方形の区画溝が検出され、館跡と考えられている。仙元山南麓の押切遺跡西隣に位置する昌福寺は、房憲が創建したとされる。

江戸時代になると、深谷城は程なく廃城となり、深谷の大部分は天領となる。また、岡部には岡部藩があり、陣屋が構えられた。



第3図 深谷城跡第14次調査区全体測量図

## Ⅲ 遺構と遺物

### 1 概要

今回の調査で確認された遺構は、土坑16基、井戸2基、ピット31基、堀1条である。遺構は全て中世のものであり、深谷城に関するものと思われる。調査区の東端に大規模な堀が確認されたことは大きな成果である。堀は一部西に張り出す。湧水が激しかったため、底面までの調査は一部分にとどまった。そのため、堀の詳細な構造は不明である。

また、遺物はほとんどが縄文時代のものである。縄文後期初頭を中心とするもので、該期の集落が周辺に広がっていたものと思われる。

### 2 縄文時代の遺物

第4図1は胎土に繊維を含み、地文にLRの縄文が施される。縄文前期中葉の所産である。第1号土坑から出土した。

第4図2～第5図53は中期末～後期初頭のものと思われる。第4図2～18は口縁部資料である。2～4は口縁下に2条の沈線とLRの縄文が施される。2は第11号土坑、3は第5号土坑、4は第3号土坑から出土した。5～8は口唇部が内屈し、5・6は1条、7は2条の沈線が口唇部に巡る。8は口唇部に竹管状工具による円形刺突と沈線が施される。5は第11号土坑、6・8は第1号堀、7は調査区一括出土である。9は口縁下に幅広の沈線が巡り、胴部には6条1組の櫛歯状工具による条線が縦位及び斜位に施される。39と同一個体と思われる。第5号土坑から出土した。10は波状口縁で、口唇が内屈する。横位に沈線が施される。11は口縁下に、隆帯による楕円形の区画が作られる。区画内に横位の沈線、また頸部に横位の沈線が巡る。第4号土坑から出土した。12～18は無文の口縁部である。14は小突起を有する。16は口唇が強く内屈する。17・18は口縁下が強く括れるもので、同一個体と思

れる。12は第3号土坑、13は第5号土坑、14は第1号井戸、15・16・18は第11号土坑、17は第1号堀から出土した。

19は円盤状の突起である。横に直径9mmの孔が貫通する。隆帯でS字状の文様が描かれる。P18から出土した。20は環状の突起で、正面と上部に孔が穿たれる。正面には円形刺突と沈線が施される。21は円形刺突を伴う円形貼付文と横位の沈線が施される。第5号土坑から出土した。

22は微隆起線が垂下し、縦の縄文帯と無文帯が交互に配されるものである。LRの縄文が施される。第1号堀から出土した。

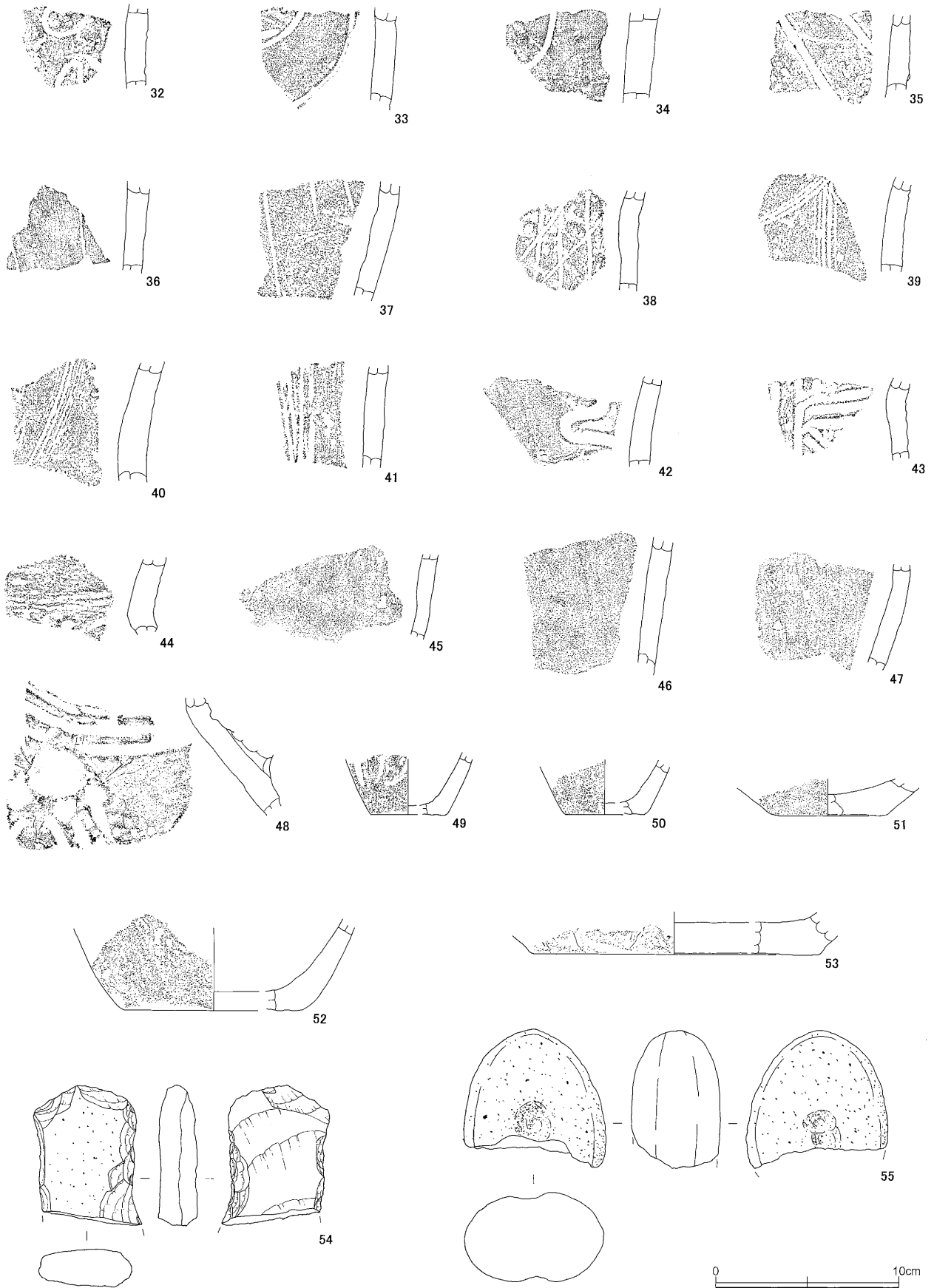
23～37は称名寺Ⅱ式である。23～28は列点が施される。23は第1号堀、24・35は第5号土坑、25は第6号土坑、26・37は第1号井戸、27・32・34は調査区一括、28・36は第11号土坑、29はP24、30は第9号土坑、31は第1号土坑、33は第2号井戸から出土した。

38は縦位と斜位の沈線で格子状文が描かれる。第3号土坑から出土した。39は6条1組の櫛歯状工具による条線が縦位及び斜位に施される。9と同一個体と思われる。第5号土坑から出土した。40は5条1組の櫛歯状工具による条線が斜位に施される。第11号土坑から出土した。41は縦位の集合沈線が施される。第3号土坑から出土した。42は蛇行沈線が垂下する。縄文は認められない。第11号土坑から出土した。43・44はやや強い括れを有する。43は縦位、横位、斜位の太い沈線がやや密に施される。また、列点も認められる。44は頸部が無文で、胴部に沈線がわずかに認められる。43は第1号井戸、44は第11号土坑から出土した。45～47は無文である。45は第1号堀、46は第2号井戸、47は第1号土坑から出土した。48は壺形土器である。括れ部に3条の沈線が巡り、把手が付く。そこから3本1組の沈線で文様が描かれる。第1号堀から出土した。

49～53は底部資料である。49は推定底径4.0cmを測る。沈線が垂下する。50は推定底径4.3cm、51は推定



第4図 縄文時代の遺物（1）



第5図 縄文時代の遺物（2）

底径6.3cm、52は推定底径9.4cm、53は推定底径15.4cmを測る。51は第1号堀、52は調査区一括、53は第1号井戸から出土した。

54・55は石器である。54は打製石斧である。残存長7.1cm、幅5.4cm、厚さ2.0cmを測る。砂岩製で、中央に弱い抉りを有する。第1号堀から出土した。55は磨石である。残存長7.3cm、幅7.6cm、厚さ4.8cmを測る。安山岩製で、両面を使用しており、凹みも両面にある。第1号堀から出土した。

### 3 中世の遺構・遺物

#### a 土坑

##### 第1号土坑（第6図）

調査区南西部に位置する。平面形態は隅丸長方形で、長軸2.1m、短軸1.3mを測る。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは5cmである。壁は斜めに立ち上がる。主軸方位はN-17°-Eである。

遺構に伴う時期のもので図示できる遺物は出土しなかった。

##### 第2号土坑（第6図）

調査区西部に位置し、第3号土坑に切られる。平面形態は隅丸長方形で、長軸2.4m、短軸1.0mを測る。底面は両端がやや深く、確認面からの深さは最深部で20cmである。壁は斜めに立ち上がる。主軸方位はN-66°-Wである。

遺構に伴う時期のもので図示できる遺物は出土しなかった。

##### 第3号土坑（第6図）

調査区西部に位置し、第2・4号土坑を切る。平面形態は隅丸長方形が2つ連結した形で、本来は2基の重複であった可能性もある。長軸3.8m、短軸1.0mを測る。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは10cmである。主軸方位はN-55°-Wである。

遺構に伴う時期のもので図示できる遺物は出土しなかった。

##### 第4号土坑（第6図）

調査区南西部に位置し、第3・5号土坑に切られる。平面形態は不整楕円形で、長軸2.2m、短軸1.1mを測る。底面は中央が深くなり、確認面からの深さは最深部で30cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-40°-Wである。

遺構に伴う時期のもので図示できる遺物は出土しなかった。

##### 第5号土坑（第6図）

調査区南西部に位置し、第4号土坑を切り、第8号土坑に切られる。平面形態は隅丸長方形で、長軸2.1m、短軸1.4mを測る。底面は東側が深くなる。確認面からの深さは西側が20cm、東側が30cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-73°-Wである。

遺構に伴う時期のもので図示できる遺物は出土しなかった。

##### 第6号土坑（第6図）

調査区南西部に位置する。平面形態は隅丸長方形で、長軸1.6m以上、短軸1.2mを測る。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは25cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-29°-Eである。

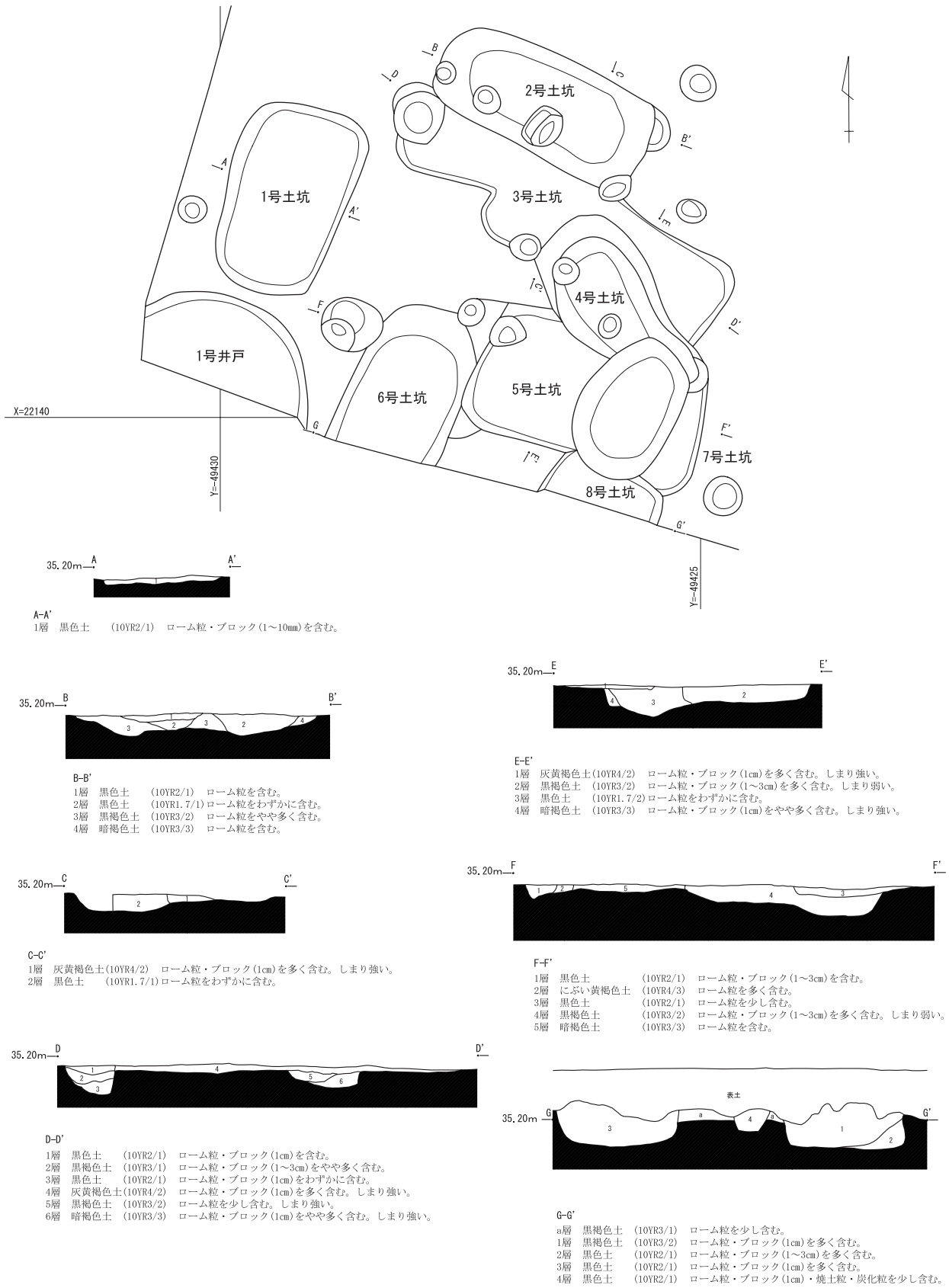
遺構に伴う時期のもので図示できる遺物は出土しなかった。

##### 第7号土坑（第6図）

調査区南西部に位置し、第4・5号土坑を切り、第8号土坑に切られる。平面形態は隅丸長方形で、南北軸1.2m、東西軸1.2mを測る。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは10cmである。壁は斜めに立ち上がる。主軸方位はN-10°-Eである。

遺構に伴う時期のもので図示できる遺物は出土しなかった。





第6図 第1～8号土坑

### 第8号土坑（第6図）

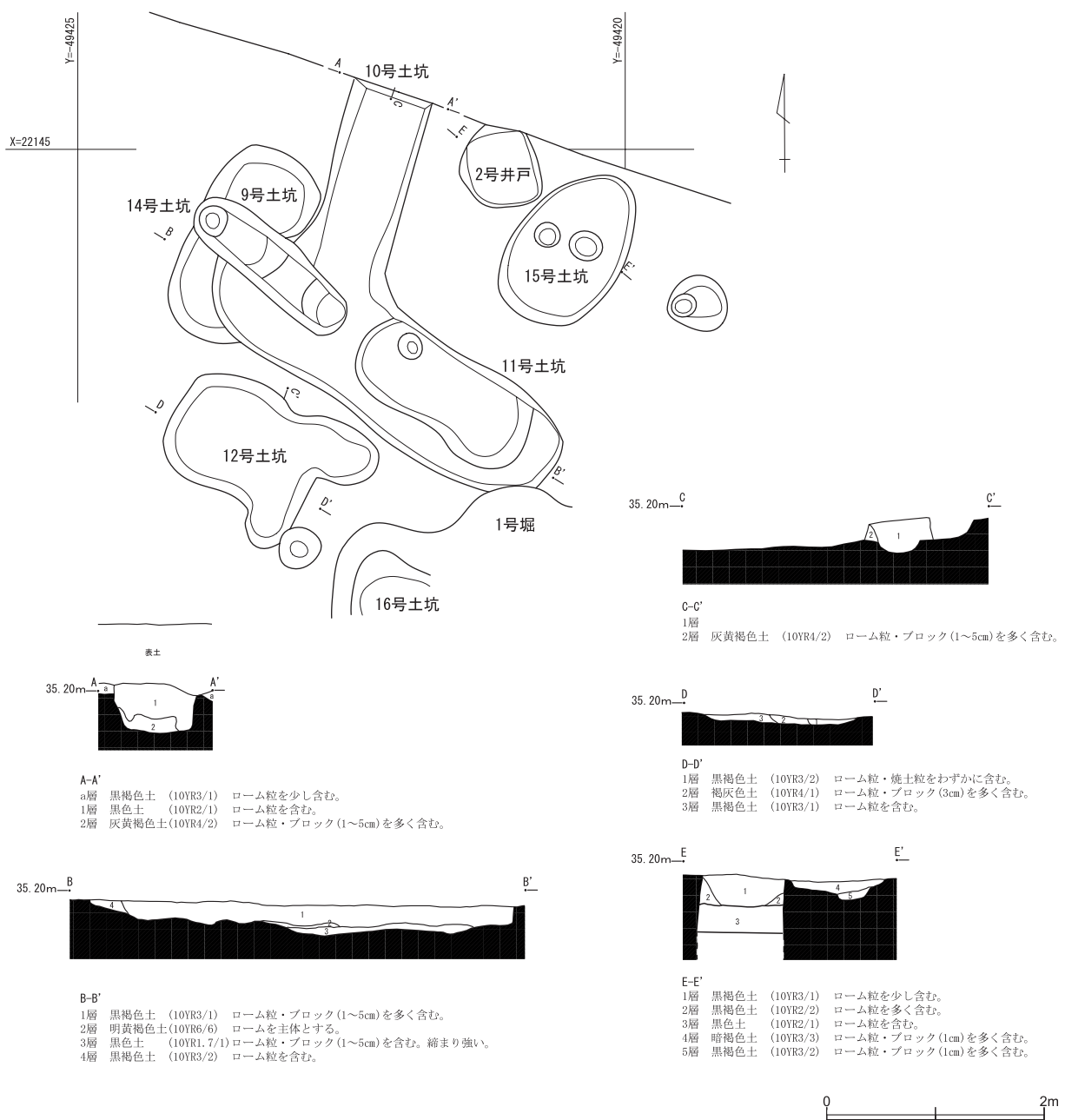
調査区南西部に位置する。平面形態は隅丸方形で、東西軸1.3mを測る。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは40cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-32°-Eである。

遺構に伴う時期のもので図示できる遺物は出土しなかった。

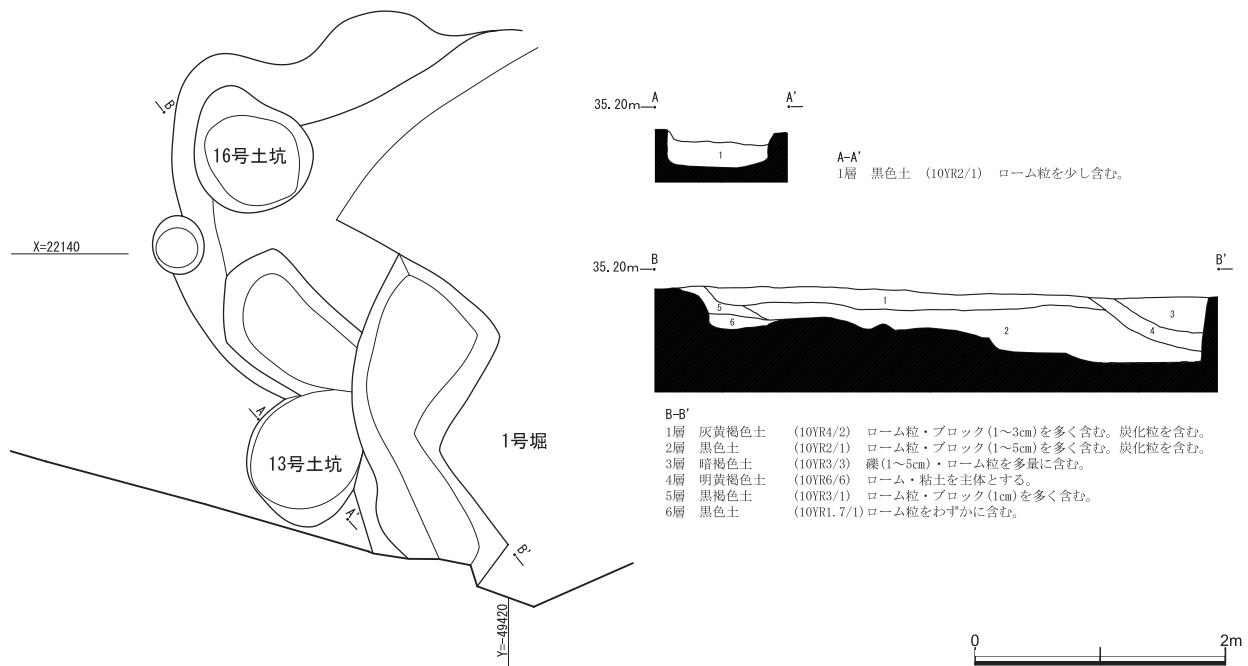
### 第9号土坑（第7図）

調査区北部に位置し、第11・14号土坑に切られる。平面形態は隅丸長方形で、長軸1.9m、短軸0.9mを測る。底面は中央がやや深く、確認面からの深さは最深部で10cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-30°-Eである。

遺構に伴う時期のもので図示できる遺物は出土しなかった。



第7図 第9~12・14・15号土坑、第2号井戸



第8図 第13・16号土坑

#### 第10号土坑 (第7図)

調査区北部に位置し、第11・14号土坑に切られる。平面形態は長方形で、長軸1.8m以上、短軸0.7mを測る。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは40cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-19°-Eである。

遺構に伴う時期のもので図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第11号土坑 (第7図、第12図1)

調査区北部に位置し、第9・10号土坑を切り、第14号土坑と切り合う。平面形態は隅丸長方形で、長軸1.85m、短軸0.7mを測る。底面は東部が一部深くなり、縮まりの良い黒色土が堆積する。確認面からの深さは15cmで、東部の深い箇所は25cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-54°-Wである。

遺構に伴う時期のもので図示できた遺物は、第12図1のカワラケの底部である。推定底径4.4cm、胎土に白・赤・黒色粒、角閃石、雲母を含む。焼成は普通、色調は赤褐色を呈し、残存率は20%である。

#### 第12号土坑 (第7図)

調査区中央部に位置する。平面形態は不整形で、長軸1.9m、短軸1.0mを測る。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは5cmである。壁は斜めに立ち上がる。主軸方位はN-66°-Wである。

遺構に伴う時期のもので図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第13号土坑 (第8図)

調査区南東部に位置する。平面形態は楕円形で、直径1.0mを測る。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは25cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

遺構に伴う時期のもので図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第14号土坑 (第7図)

調査区北部に位置し、第9・10号土坑を切り、第11号土坑と切り合う。平面形態は隅丸長方形で、長軸1.7m、短軸0.5mを測る。底面は両端がほぼ同じく深くなり、確認面からの深さは47cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-54°-Wである。

遺構に伴う時期のもので図示できる遺物は出土しなかった。

### 第15号土坑 (第7図)

調査区北部に位置する。平面形態は楕円形で、長径1.6m、短径1.0mを測る。底面は中央がやや深く、確認面からの深さは最深部で10cmである。壁は斜めに立ち上がる。主軸方位はN-36°-Eである。底面からの深さ約10cmのピットが2基確認された。

遺構に伴う時期のもので図示できる遺物は出土しなかった。

### 第16号土坑 (第8図)

調査区中央部に位置する。平面形態は不整楕円形で、長径1.3m、短径0.9mを測る。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは35cmである。壁は斜めに立ち上がる。

遺構に伴う時期のもので図示できる遺物は出土しなかった。

## b 井戸

### 第1号井戸 (第9図、第12図2～6)

調査区南西部に位置する。平面形態は円形で、直径

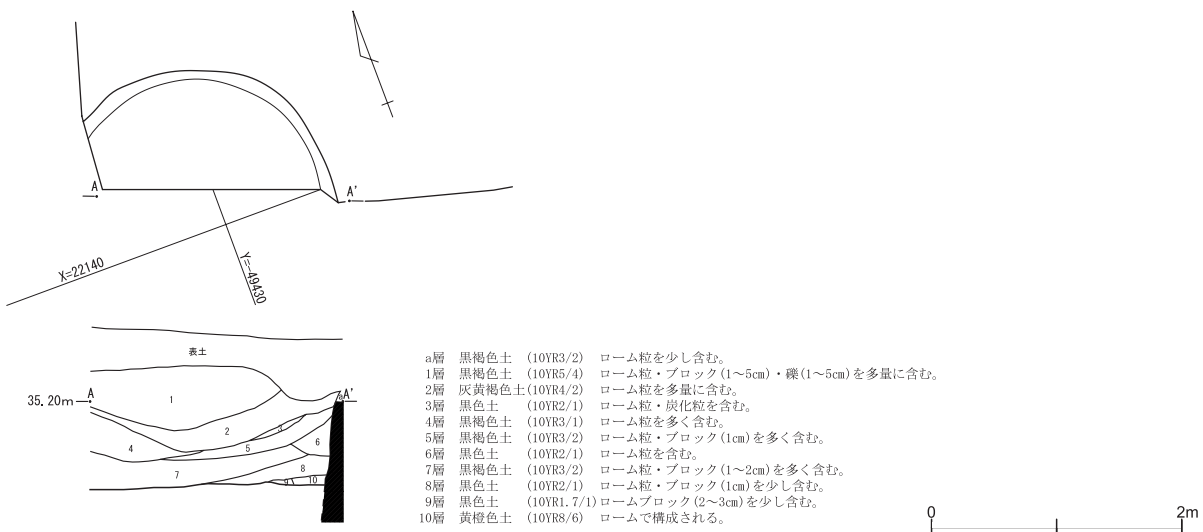
約2.2mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。上層には直径1～5cm程度の礫が多く含まれる。

なお、湧水が激しかったため、途中で調査を断念した。掘り下げを行なったのは、確認面から0.8mの深さまでである。

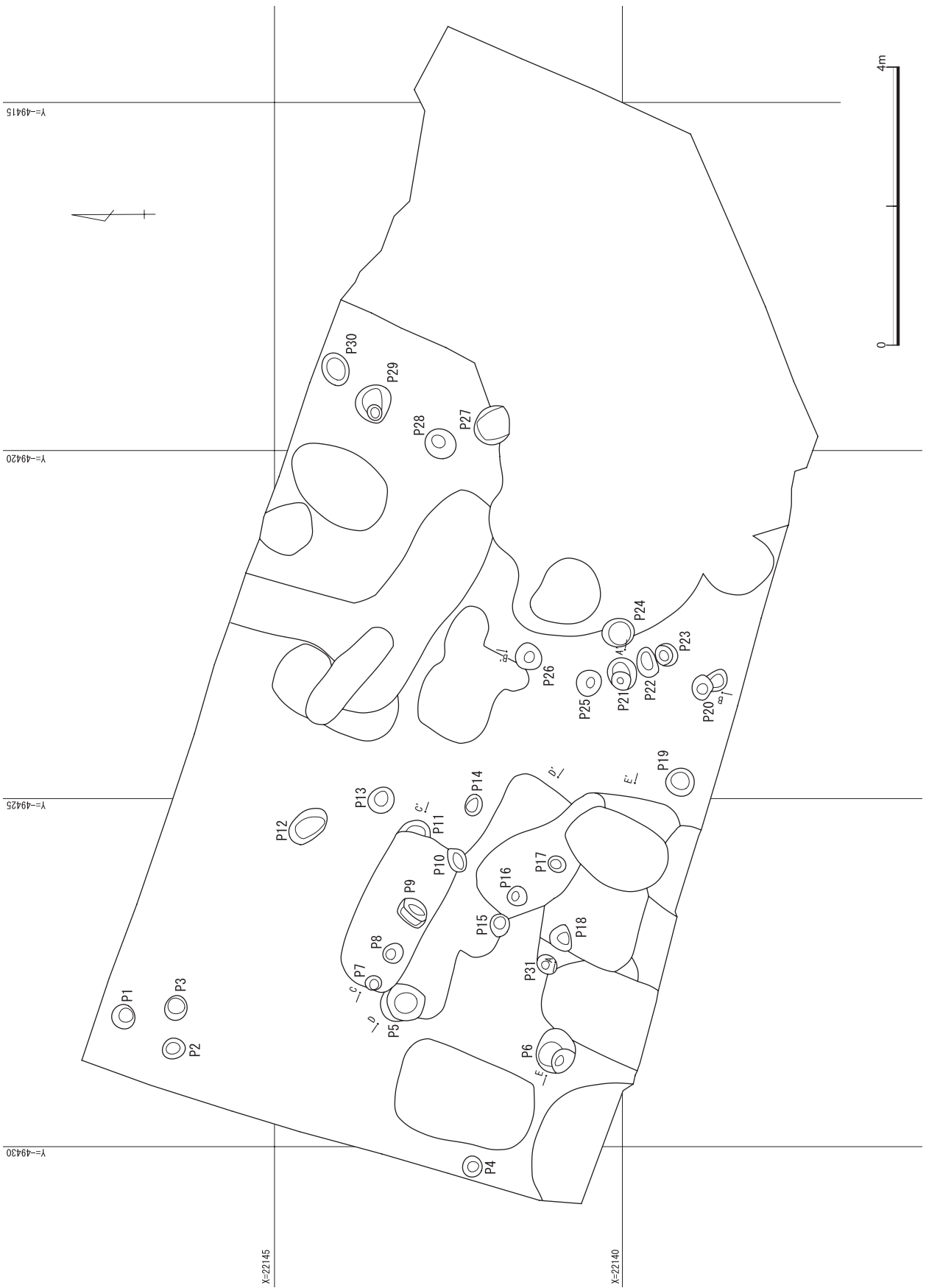
遺構に伴う時期のもので図示できた遺物は、第12図2～6である。2～4はカワラケで、2は推定口径8.0cm、器高2.3cm、推定底径4.4cmを測る。胎土に白・赤・黒色粒、角閃石、片岩、雲母を含み、焼成は不良、色調は橙色を呈し、残存率は20%である。3は推定底径4.8cm、胎土に白・赤・黒色粒、角閃石、雲母を含む。焼成は普通、色調は橙色を呈し、残存率は20%である。4は推定底径6.2cm、胎土に白・赤・黒色粒、角閃石、雲母を含む。焼成は普通、色調は橙色を呈し、残存率は20%である。5は瓦質の播鉢である。内面に6条1組の櫛歯状工具による直線と波状の条線が施される。胎土に白・赤・黒色粒、角閃石、砂礫を含み、焼成は普通、色調は灰褐色を呈する。6は安山岩製の石臼である。厚さは2.0cmで、縁の厚さは6.4cmを測る。

### 第2号井戸 (第7図)

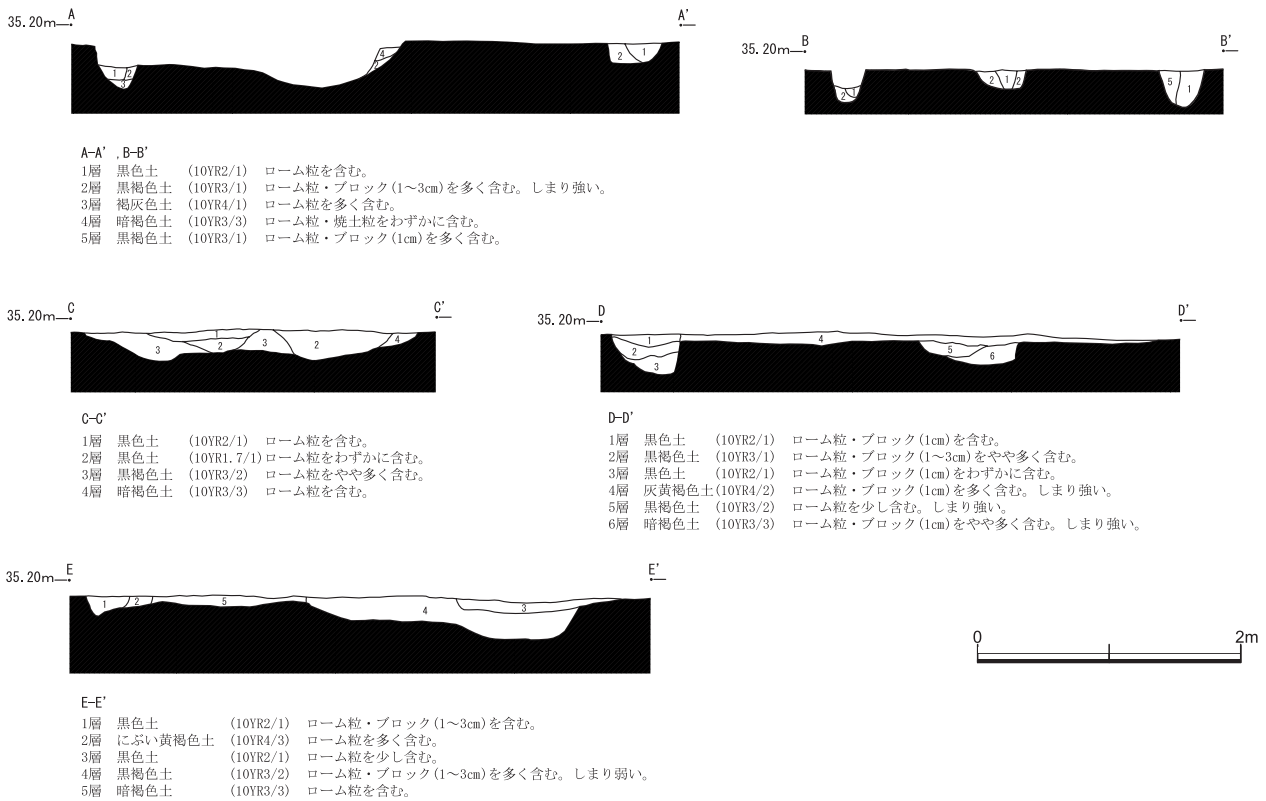
調査区北部で確認された。平面形態は円形で、直径



第9図 第1号井戸



第10図 ピット群 (1)



第11図 ピット群(2)

0.7 mを測る。壁は垂直に立ち上がる。

なお、湧水が激しかったため、途中で調査を断念した。掘り下げを行なったのは、確認面から0.5 mの深さまでである。

遺構に伴う時期のもので図示できる遺物は出土しなかった。

### c ピット

単独で確認されたピットとその断面図を第10・11図に示した。ピットは南半部を中心に分布している。

確認面からの深さは、P 1 : 25cm、P 2 : 11cm、P 3 : 45cm、P 4 : 13cm、P 5 : 30cm、P 6 : 15cm、P 7 : 41cm、P 8 : 30cm、P 9 : 38cm、P 10 : 18cm、P 11 : 10cm、P 12 : 16cm、P 13 : 23cm、P 14 : 18cm、P 15 : 50cm、P 16 : 39cm、P 17 : 48cm、P 18 : 41cm、P 19 : 32cm、P 20 : 25cm、P 21 : 23cm、P 22 : 16cm、P 23 : 13cm、P 24 : 48cm、P 25 : 22cm、P 26 : 29cm、P 27 : 17cm、P 28 : 22cm、P 29 : 29cm、P 30 : 6 cm、

P 31 : 20cm。

遺構に伴う時期のもので図示できた遺物は、第12図7である。鏡の鉸具頭で、P 15から出土した。鉄製で錆が非常に激しい。下部は幅1.5 cmの板状で、ハの字に広がり鏡本体との連結をみるとみられる。鉸具の部分は長さ3.8 cm、幅6.7 cmを測る。

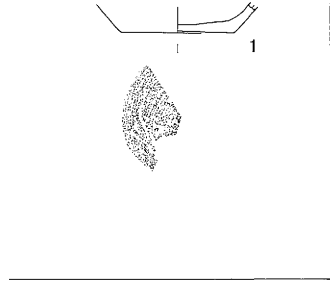
### d 堀

#### 第1号堀(第13・14図)

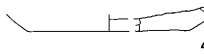
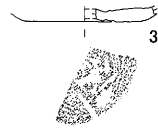
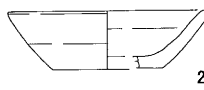
調査区東部で確認された。底面近くまで掘り下げた東端が堀のほぼ中心に当たると思われ、幅は推定約6 mと大きなものである。壁は段を有して斜めに立ち上がる。湧水が激しく、底面までの掘削は行なえなかったが、確認面からの深さは1.2 m以上である。部分的な掘削のため、堀の詳細な構造は不明である。

南部では浅い張り出し部が認められる。幅約3 m、西に約3 m張り出すもので、確認面からの深さは30~50 cmを測る。この部分から、第14図7の焙烙が出土し

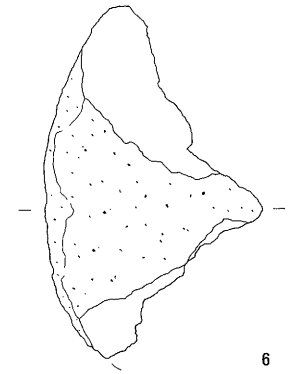
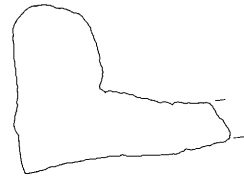
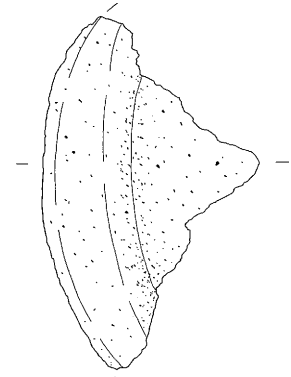
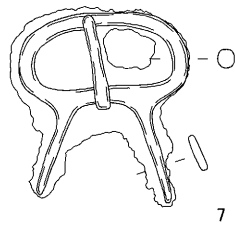
第11号土坑



第1号井戸



P15

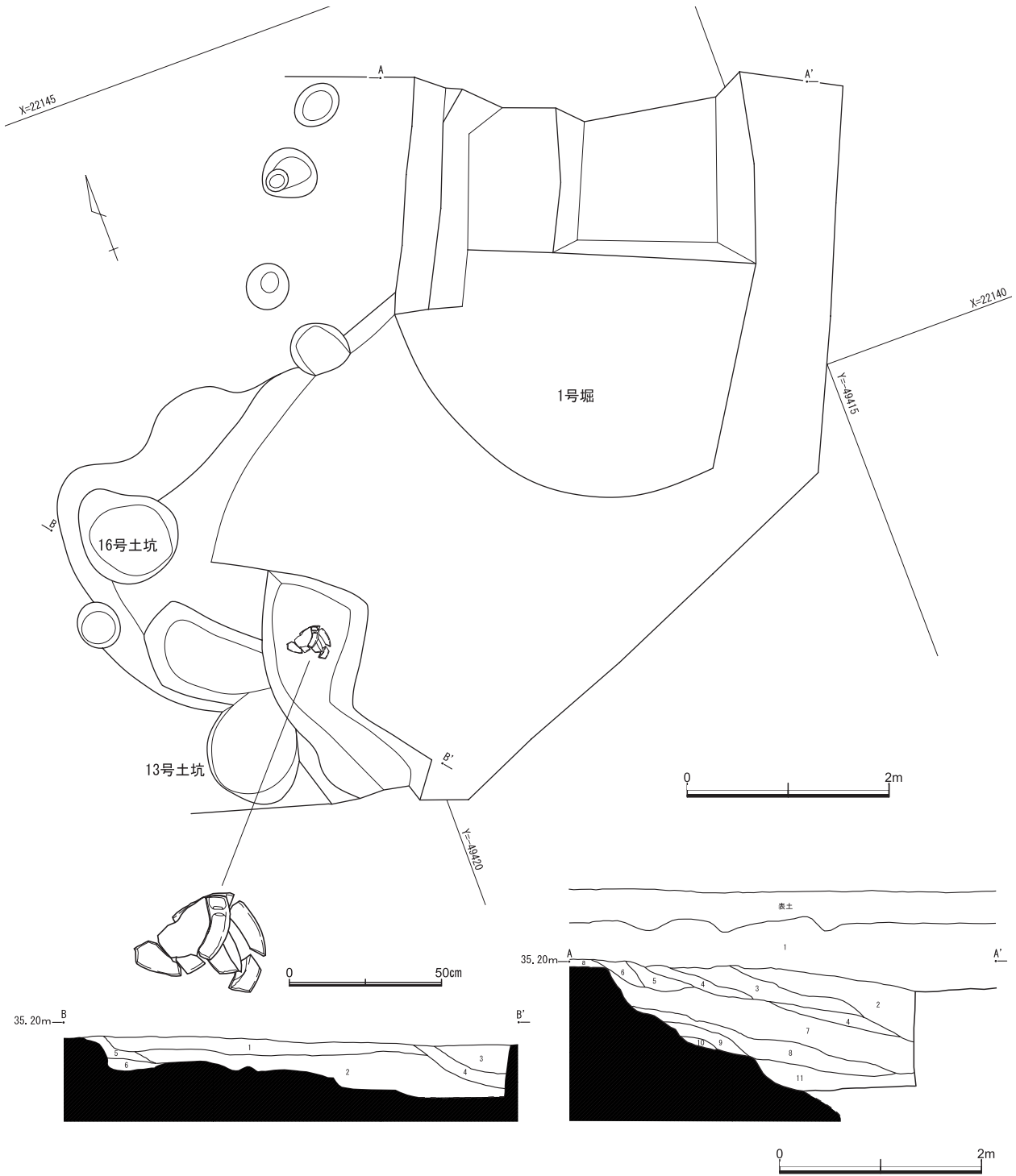


第12図 土坑・井戸・ピット出土遺物

た。

遺構に伴う時期のもので図示できた遺物は、第14図1～7である。1～4はカワラケである。1は推定口径11.6cm、器高2.5cm、推定底径7.4cmを測る。胎土に白・赤・黒色粒、角閃石、砂礫、雲母を含み、焼成は普通、色調は赤褐色、残存率は25%である。2は推定口径11.2cm、器高2.1cm、推定底径7.6cmを測る。胎土に白・赤・黒色粒を含み、焼成は不良、色調は橙色、残存率は20%である。3は推定口径10.8cm、胎土に白・黒色粒、角閃石、砂礫、片岩、雲母を含む。焼成は普通、色調は暗褐色を呈し、残存率は15%である。4

は推定底径7.0cm、胎土に白・赤・黒色粒、石英、角閃石を含む。焼成は普通、色調は橙色を呈し、残存率は25%である。5は砂岩製の砥石である。3面使用しており、残存長9.0cm、幅4.7cm、厚さ5.5cmを測る。6は白磁高台皿である。推定底径6.0cm、胎土に黒色粒を含む。焼成は良好、色調は白色を呈し、残存率は10%である。7は焙烙である。内耳部は3箇所あり、軟質で、口径37.0cm、底径32.6cm、器高5.9cmを測る。胎土に白・赤・黒色粒、石英、角閃石、片岩、砂礫、雲母を含み、焼成は普通、色調は暗褐色を呈し、ほぼ完形である。



**B-B'**

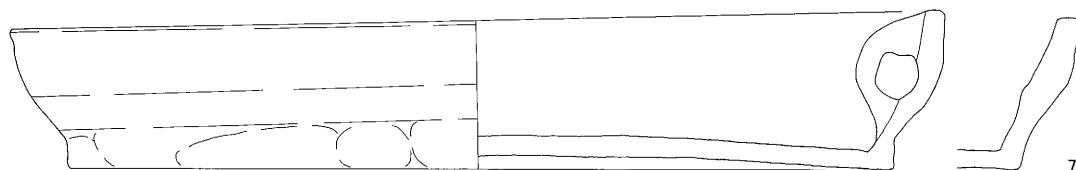
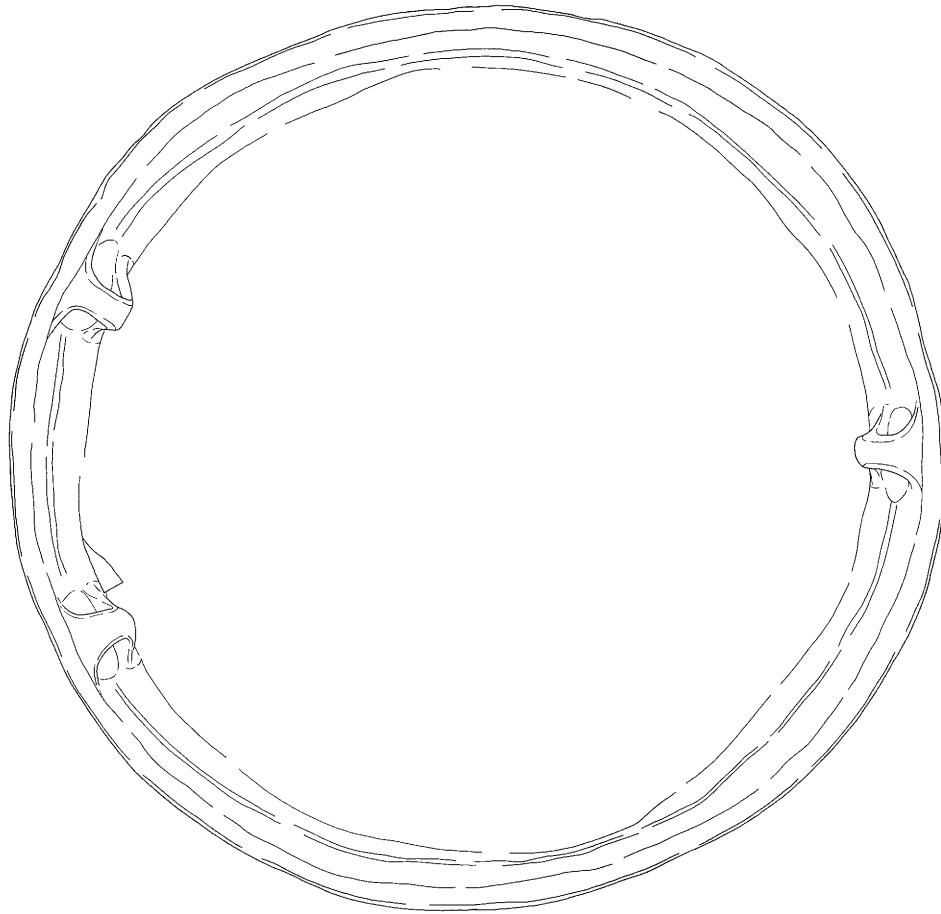
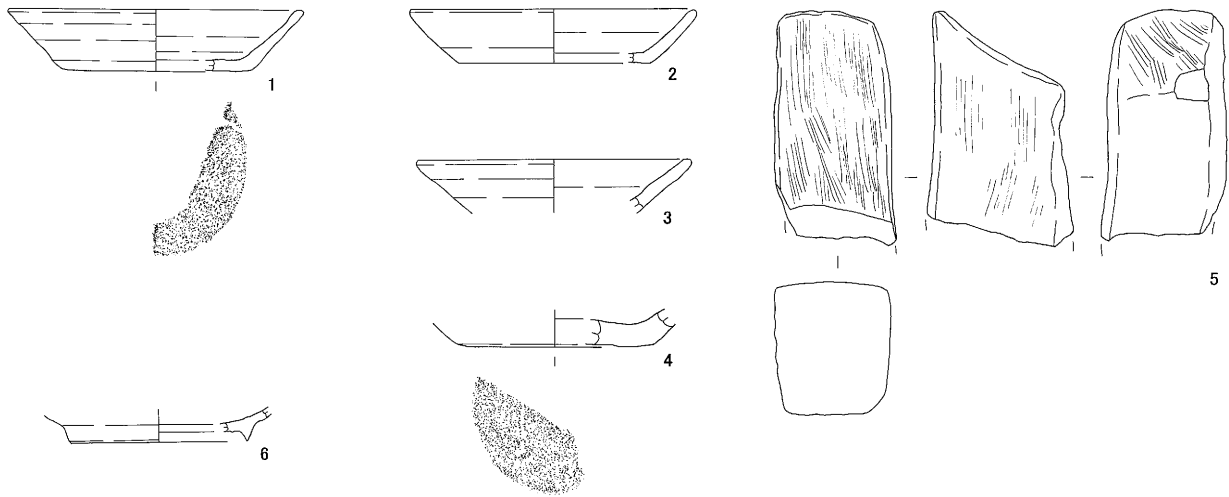
- |    |                 |                               |
|----|-----------------|-------------------------------|
| 1層 | 灰黄褐色土 (10VR4/2) | ローム粒・ブロック(1~3cm)を多く含む。炭化粒を含む。 |
| 2層 | 黒色土 (10VR2/1)   | ローム粒・ブロック(1~5cm)を多く含む。炭化粒を含む。 |
| 3層 | 暗褐色土 (10VR3/3)  | 礫(1~5cm)・ローム粒を多量に含む。          |
| 4層 | 明黄褐色土 (10VR6/6) | ローム・粘土を主体とする。                 |
| 5層 | 黒褐色土 (10VR3/1)  | ローム粒・ブロック(1cm)を多く含む。          |
| 6層 | 黒色土 (10VR1.7/1) | ローム粒をわずかに含む。                  |

**SD1**

- |     |                 |                                   |
|-----|-----------------|-----------------------------------|
| a層  | 黒褐色土 (10VR3/1)  | ローム粒を含む。                          |
| 1層  | 褐灰色土 (10VR4/1)  | ローム粒・焼土粒・炭化粒・白色粒を含む。              |
| 2層  | 灰黄褐色土 (10VR5/2) | ローム粒・ブロック(1~10cm)・礫(1~10cm)多量に含む。 |
| 3層  | 褐灰色土 (10VR4/1)  | ローム粒・焼土粒・炭化粒を含む。                  |
| 4層  | 褐灰色土 (10VR4/1)  | ローム粒・ブロック(1~3cm)をやや多く含む。          |
|     |                 | 焼土粒・炭化粒を含む。                       |
| 5層  | 黒褐色土 (10VR3/2)  | ローム粒・焼土粒・炭化粒を含む。                  |
| 6層  | 黒褐色土 (10VR3/1)  | ローム粒をやや多く含む。                      |
| 7層  | 黒色土 (10VR2/1)   | ローム粒・ブロック(1cm)・焼土粒・炭化粒を含む。        |
| 8層  | 黒褐色土 (10VR3/1)  | ローム粒・ブロック(1~5cm)を多く含む。            |
|     |                 | 焼土粒・炭化粒を含む。                       |
| 9層  | 黒褐色土 (10VR2/2)  | ローム粒・焼土粒・炭化粒を含む。                  |
| 10層 | 黒色土 (10VR1.7/1) | ローム粒・ブロック(1~2cm)を多く含む。            |
| 11層 | 褐灰色土 (10VR4/1)  | ローム粒・ブロック(1~5cm)を多く含む。            |
|     |                 | 粘土・焼土粒・炭化粒を含む。                    |

第13図 第1号堀





第14图 第1号掘出土遺物

## Ⅳ 調査のまとめ

前章まで述べてきた通り、今回の調査では土坑16基、井戸2基、ピット31基、堀1条が確認された。出土遺物の大半は縄文時代後期初頭のものであるが、それに伴う遺構は調査区内からは確認されなかった。確認された遺構は全て中世深谷城に伴うものである。

第15図は、明治時代の地籍図から水路・池・田の範囲と、現在残る土塁状の遺構、そして発掘調査地点を示した深谷城跡全体図である（知久2002から作成）。第14次調査区の古い字名は掃部屋敷で、主郭から曲輪1を挟んだ南東部に当たる。この周辺にはほとんど堀の痕跡が見出せなかったため、曲輪12として広い範囲と捉えた。しかし、第13次調査区からはやや小規模な南北方向の溝、今回の第14次調査区東端部からも南北方向の堀が確認されている。そのため、堀の痕跡は地表面には表れていないものの、曲輪12の内部は更に細分されることが考えられる。現在管領稲荷神社がある

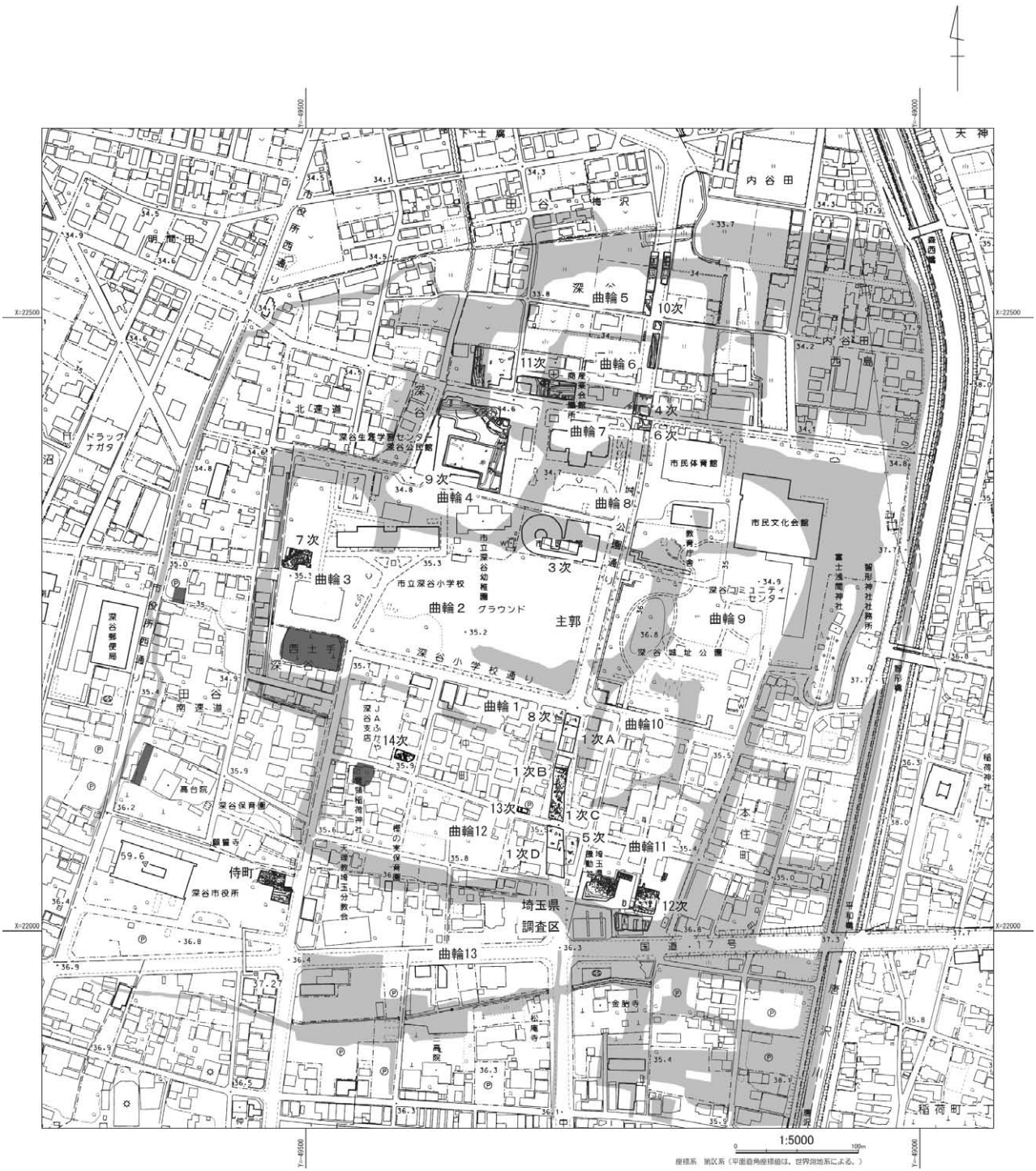
高まりは、本来は西の堀に沿って続き、大規模な土塁であったと思われる。そこから第14次調査区の堀までの距離は約30mであり、南北に細長い曲輪があったと思われる。遺構は土坑墓が中心であるが、他にピット群や井戸跡も確認された。建物跡は確認できなかったが、周辺に存在することが推定される。

中世の出土遺物は、16世紀代のものがほとんど考えられる。特筆できる遺物は、P15から出土した鎧の鉸具頭である。錆が激しいが完形である。ピット内から単独で出土したため、詳細な時期は不明であるが、深谷城に伴う時期のものであろう。

最後に改めて、この発掘調査に深いご理解とご協力を頂いた方々をはじめ、深谷城跡の発掘作業、整理作業に携わり、文化財を記録保存して後世に残すことにご尽力頂いた皆様に敬意を表したい。

### 〈参考文献〉

- 青木克尚他 1996 『深谷城跡（第4次）』 埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第49集  
青木克尚他 1997 『深谷城跡（第5次）』 埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第51集  
青木克尚他 1997 『深谷城跡（第6次）』 埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第52集  
澤出晃越 1987 『深谷城跡』 埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集  
澤出晃越 1991 『深谷城跡（第3次）』 埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第27集  
知久裕昭 2002 「深谷城の再検討」『埼玉考古』第37号 埼玉考古学会  
知久裕昭 2004 『深谷城跡（第7次）』 埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第69集  
知久裕昭 2004 『侍町遺跡』 埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第70集  
知久裕昭 2009 『深谷城跡（第13次）』 埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第108集  
永井智教他 2006 『深谷城跡（第8～11次）』 埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第77集  
宮本直樹 2009 『深谷城跡（第12次）』 埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第107集



- : 水路、池、田の範囲
- : 現在残る土塁状遺構

第15図 深谷城跡全体図

# 写真図版



調査区全景（東から）



調査区全景（西から）



南部遺構群

# 图版 2



第 1 号土坑



第 2 ~ 8 号土坑



第 4 ~ 8 号土坑



第9~11·14号土坑



第15号土坑



第13·16号土坑

# 图版 4



第 1 号井戸



第 2 号井戸



第 1 号堀





第1号掘遺物出土状況



調査風景



縄文時代の遺物(1)



縄文時代の遺物(2)

図版 6



縄文時代の遺物(3)



第11号土坑、第1号井戸出土遺物



第1号堀出土遺物(1)



第1号堀出土遺物(2)



P15出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	ふかやじょうせき (だい14じ)							
書名	深谷城跡 (第14次)							
副書名								
巻次								
シリーズ名	埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第110集							
編著者名	知久裕昭							
編集機関	深谷市教育委員会							
所在地	〒366-0823 埼玉県深谷市本住町17-3 TEL 048-572-9581							
発行年月日	2010(平成22)年1月29日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 (° , ’ ’’)	東 経 (° , ’ ’’)	調 査 期 間	調 査 面 積	調 査 原 因
		市 町 村	遺跡番号					
ふかやじょうせき 深谷城跡	ふかやしなからちょう 深谷市仲町456	11218	108	36 19 83	139 28 37	20090817 ~ 20090824	130m <sup>2</sup>	分譲住宅
所収遺跡	種 別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特 記 事 項	
深谷城跡	城 跡	縄文時代後期 中 世	土 井 ピ	坑 戸 ト	16基 2基 31基 1条	縄文土器 石器 中世土器 磁器 石 白 砥 石 馬 具		

---

---

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第110集

深 谷 城 跡 (第14集)

印 刷 平成22年 1月25日

発 行 平成22年 1月29日

発 行 埼 玉 県 深 谷 市 教 育 委 員 会

---

---